書簡　一（新編井月全集 506）

宛名の五声は西春近村下牧の酒屋加納与惣で、「井月の句集」に載せた唯一の書簡文で、他はその後の索捜に係る。

｛五声は、芭蕉堂（＝俳諧の道場）を建てるために土地を寄進してもいい、と言ってくれた人物。下牧とは、高遠藩七ヶ郷のひとつ「春近郷」にあった村で、天竜川の西岸。明治の合併で西春近村の一部になり、昭和の合併で伊那市の一部になった。｝

炎暑之時節 益 無 御 障事務御 精 勤 且風雅無油断御弄詠之旨千万目出多久 奉　寿　候 。御渾家御清栄是又珍奇 不 斜 奉南　山　候 。｛ここまではあいさつ文であるから、いちいち解釈する必要なし。「南山」は正確には「南山の寿」といい、長寿を祝う言葉。｝

扨其後者 乍 存 御無沙多罪 申 訳一 言 無御座万謝此事に 候 。【さてその後は、わかっていながらご無沙汰をし、申し開きの言葉もありません。】

昨年貴館を発し上部社 中 へ投じ 候 処 殊の外取 扱 よろしく、毎日夜席を設け俳酒盛大 凡 出 席三 十 人近きに及ぶ。【昨年あなたの家を出発したあと、上穂（×上部）の仲間たちのところに来ております。とても親切にしてくれて、毎晩宴席を設けて盛大に酒を飲み、その出席者は三十人近くに及びます。】｛つまり近況報告だろう。上穂村は、高遠藩ではなく旧幕府の旗本領にあった宿場。明治の合併で赤穂村の一部になり、昭和の合併で駒ヶ根市の一部になった。「社中」は俳諧の仲間や門人たちのこと。｝

翁の 掟 にも 女 の弟子は取べからざるの禁はあれども、未 熟 凡夫の 心 よりしては中々遁すべからずとこそ。上部三美人の随一 某 といふもの元来俳諧に 志 し深く、手跡は亀の家蔵六ぬしの門に出て発句短冊ぶり 甚 美事、閉月 羞 花沈魚落雁の 粧 ひとは斯る君をや 申 らめ。【芭蕉さまの掟にも「女の弟子を作るな」というのがありますが、未熟な凡人である私は、機会を逃

したくありません。「上穂三美人」と呼ばれる中でも随一の女性がおりまして、もともと俳諧の志が深く、書道は亀の家蔵六に学び、俳句の短冊もとても見事で、月も花も魚も雁も、みな彼女の美しさには負けてしまうでしょう。】{「翁」は松尾芭蕉のこと。女性の名は、駒ヶ根市赤穂の小町屋に住んでいた「生駒屋のおりよ」という。おりよを教えた「亀の家蔵六」は、漢学・俳諧に優れた人物で、明治維新後は松崎量平という名で学校教師を務めていた。}

社中何れもうつゝをぬかし正体を失ひ、春宵一刻は先此時なりと千金をこそ投うたず共、責て井月に四五円の恵みもあらば通貴公子にも増るべきに、【上穂の仲間たちは、うつつをぬかして酔いつぶれ、春の宵を楽しみ、大金こそ費やさなくても、せめて四～五円のお金があれば、この井月も立派な貴公子に負けないでしょうに、】{「春宵一刻」は、正確には「春宵一刻値千金」といい、すばらしい春の宵を楽しむ様子。}

未だ不学の少年争か仁義信徳の深切を知らんや。柳の家が為体寒中の薄衣范雎が須賈にみへしに彷彿たり。心の目算忽ち変じて意正に茫然たり。外に一少策を設け又々齟齬す。【まだ勉強の足りない小わっぱが、どうして仁・義・信・徳を知っているでしょうか。私のありさまといえば、寒中に薄衣を着て、まるで范雎が須賈に会いに行ったときのようにみすぼらしいです。心に描いていた計画が変わってしまい、茫然とした思いです。ほかにも少し策を考えていましたが、上手くいきませんでした。】{仁義を知らない小わっぱとは、誰のことだろうか。おそらく春近で、芭蕉堂建設をめぐるトラブルが発生し、井月に冷たい仕打ちをした人物がいたのだろう。その人物のせいで、自分は今、逆境に陥ってしまった、という文脈のようである。「柳の家」は井月の雅号。「范雎」「須賈」は中国の古典『史記』に出てくる人物。「心の目算たちまち変じて」は、芭蕉堂を建てようという計画が挫折してしまったことを言っているのだろう。}

子供の手まり唄に帯に短し襷には長しと申如く、彼是聊か取集めたる年玉も卞和が泣し璞よりももの憂く、躊躇定りなく愚略行はれず費用嚢中を払ふに至る。【子どもの手まり唄に「帯に短し襷に流し」というのがあるように、かれこれ取り集めたお金は「卞和が泣きし

璞」よりも心もとなくて（芭蕉堂の建設費用には足りず）、実行を躊躇しているうちに計画が行われないまま、お金が無くなってしまいました。】{「帯にゃ短し襷にゃ長し」という手まり唄は、現在でも鳥取・島根・大分などの西日本に残っているようである。「卞和が泣きし璞」は、中国の古典『韓非子』にある一節。宝玉の原石を見つけたのに、だれも信じてくれない、と泣く様子である。芭蕉堂を建てたいという私の思いを、みんな理解してくれない、と嘆いているのかも知れない。「愚略」は自分のささやかな計画のこと、「嚢中を払ふ」は財布が空になった様子である。】

茲に於て亀の家のあるじも其本乱れて末おさまらずとの金言を吐き、既に殿島連の実意少きを詰て書を那須氏に投じ説諭を山好に勧むといへども、是も兎角の中なれば更に其甲斐なし。【亀の家蔵六（＝松崎量平）も、「そのもと乱れて末おさまらず」と言い、殿島の門人たちの思いやりの無さを手紙に書いて、医師の那須氏に送り、山好を諭すように頼んでくれましたが、まったく効き目がありませんでした。】{学校の松崎先生に、トラブルの仲裁を頼んだのだろう。「殿島」は春近郷にあった村で、天竜川の東岸。明治の合併で東春近村の一部になり、昭和の合併で伊那市の一部になった。「実意」は思いやりの気持ちのこと。「那須氏」は東春近村の医師。「山好」は東春近村で井月の片腕となって働いてくれた門人だったが、「そのもと乱れて末おさまらず」と言われているので、山好がトラブルの中心人物となり、門人たちを焚きつけて、井月に冷たい仕打ちをした、ということか。}

譬ひ詮議して暫く許す共終に悠々たる行路の心とは宜哉。桓鮑貧事交今人捨而如土と誰も御存じの詩文ながら思ひ合する事斯の如し。【たとえ詮議して、しばらく許したとしても、ついには心が離れてしまうでしょう。「桓鮑貧事交今人捨而如土」という、誰もが知っている詩文がありますが、まさにこのことでしょう。】{「譬ひ詮議して・・・」は、唐の詩人・張謂による一節をもじったもの。原作は「縦令然諾暫相許、終是悠悠行路心」で、「たとえしばらく親交しても、ついには通りすがりの人のように心が離れてしまう」という意味。「桓鮑貧事・・・」は唐の詩人・杜甫による一節で、「貧しかった昔の頃から変わらない友情を、今の人たちは土くれのように捨ててしまう」という意味。あんなに良くしてくれた殿島の人たちが、今は冷たい仕

打ちをしている、といった状況なのだろう。】

時に君の御袴の光りにて所々方々漂泊今に昇堂の時を失ひ、夫に色々何とか少しもよき芽も出可申哉と心は矢竹に思ひ足は石亀のごとくじたんだを踏むといへ共、未だ天運循環の辰至らざるにや漸く生て在る而已のすがた甚だ醜く、【さて、あなたの御威光をたよりに、あちこちを泊まり歩いていますが、いまだにうかがう時期を逃しています。それに、なんとか少しでもよい目が出ないかと、心は矢のようにあせっていますが、事態は亀の歩みのように進まず、いまだに運がひらけず、醜い姿でようやく生きながらえています。】{「君の御袴の光」は、なにか日本の古典からの引用だろうか。】

そも先年中沢に会莚を開くも只に慰みの事にはあらず。貴君を始段々御贔負を被下候て勧進記帳旁本国へ罷越籍の送りを持参し、草庵開基の志よりして送別会興行の雑費不少終に借金の淵に首縊るとか申如く成行き、【そもそも先年、中沢で開いたあの送別会は、ただの余興ではありませんでした。あなたをはじめ、重ね重ねご支援をいただき、寄付金帳をたずさえて本国（＝越後）へ向かい、戸籍の送りを持ち帰って草庵（＝芭蕉堂）を開こうという志でしたが、送別会の雑費がかさんで、ついに借金を抱えることになってしまいました。】{「中沢」は、現在の駒ヶ根市中沢のことではなく、高遠藩七ヶ郷のひとつ「中沢郷」のことで、天竜川東岸の、伊那市富県～駒ヶ根市東伊那～駒ヶ根市中沢までの、かなり広い地域を指す。明治五年、東伊那で井月のために百十三人が集まって、送別会が開かれた。「勧進」は、芭蕉堂建設のために寄付金を集めることだろう。「籍の送り」は、越後から信濃へ戸籍を移すための書類のこと。}

武には弓折れ矢尽き農には水損干荒とか申如く俗に商人が棒を折りと申すが如く、外に取付便りもなく日夜心労の詮方なく露命を草葉の蔭に送り空敷天然の期を待より他念無御座候。

【武士ならば弓折れ矢も尽き、農民ならば水害や日照りにみまわれ、商人ならば天秤棒が折れてしまったような状態で、ほかに頼りになるものもなく、日夜の心労をどうすることもできず、露命を草葉の陰におくり、むなしく運がひらけるのを待つよりほかにございません。】{武士・農民・

商人といった数々のたとえを用いて、自分の逆境をうったえている。}

上人の歌に世は捨て身はなきものと思へども花の咲く日は浮れこそすれ雪の降日は寒くこそあれと被申し如く、寒暑往来の秋に方り更に寸計の施すなし。【西行法師が和歌で「世を捨てて、この身は無きものと思っていても、春になれば心浮かれ、冬になれば寒く感じる」と言っているとおりです。季節はめぐって秋がやって来ますが、寒さの備えが何もできていません。】{「上人」は、平安末期の歌人・西行法師のこと。若くして武士の身分を捨てた人物である。「寸計の施すなし」は、何の対策も施せないという意味か。}

昨冬は向寒の出立残暑と服を同うし、如何に中綿を用るといへども其功能河童の屁よりも利かず、追々厳寒に逼り終に命を中沢に落さんとせしも、曽倉なる竹村某が深き情により寒気凌防の実を得今日に及ぶといへども、帰郷の手段一策も無之、【昨年の冬は、残暑のころと同じ服装で出発し、着物に中綿を入れても効き目がなく、寒さが厳しくなる中、ついに中沢郷で命を落としかけました。曽倉という集落で、竹村という人物に助けられ、ようやく今日まで生きながらえていますが、ふるさとの越後へ帰る手立ては見つかりません。】{「曽倉」は、中沢郷にあった本曽倉村・中曽倉村・大曽倉村のあたりだろう。井月を助けたのは竹村熊吉という人物。}

貴君へ御預け申置候勧進帳の上にて何程づゝか受納いたしたる其所彼所の言訳を立、将又半を分て旅費に当て肌寒の秋を待ず、少しも早く空蝉のもぬけし如く出立て、【あなたのところに預けてある寄付金の帳簿上、いくらかずつ受け取ったお金について、あれこれ何に使ったのか言い訳をしたいです。あるいは寄付金の半額をいただいて旅費にあて、秋を待たず少しでも早く、蝉が殻を脱ぎ捨てて飛び立つように越後へ出発したいです。】

越路の雁の来る頃は遅くも帰る豆名月、君が手製の早稲酒の熟すころには望月や、きりゝ駒を迎ふことといさみに勇み帰り咲、心の花を一覧に備へ申度、【越後の雁がやって来るころ、遅くとも豆名月（＝旧暦九月十三日）の頃には戻って来たいです。早ければ、あなたの手作りのどぶ

ろくが熟す望月の、駒迎えの頃（＝旧暦八月十五日）には戻れるでしょう。勇んで帰って、返り咲きの花をご覧にいれます。】{「望月」といえば、かつて朝廷に献上するための馬が飼育されていた、北佐久郡の「望月の牧」が連想され、その馬を朝廷の役人が旧暦八月十五日に出迎える行事を「駒迎え」という。手の込んだ縁語（えんご）の手法を使っているのだろう。「きりゑ」は何のことか判らないが、「勇み帰り」と「返り咲き」は掛詞（かけことば）の手法で、「心の花」は、人生もう一花咲かせたいという井月の意気込みを言っているかのようである。大げさで芝居がかったような美文。}

先（まず）は九牛（きゅうぎゅう）が一毛（いちもう）とや大海（たいかい）の一滴（いってき）とや、聊（いささ）か心（こころ）の及（およ）ぶ所（ところ）申進候（もうしすすめそうろう）。恐々頓首百拝（きょうきょうとんしゅひゃくはい）。【まずは九牛が一毛とか、大海の一滴というように、少し考えていることを申し上げました。】{「九牛が一毛」は、大きな物のほんの一部のこと。「大海の一滴」も意味は同じ。芭蕉堂建設という大きな望みを実現するため、わずかでも前進したい、と言っているのだろう。}

暑中（しょちゅう）　井月拝（せいげつはい）

五声雅兄（ごせいがけい）　玉机下（ぎょくきか）

{しかし五声は二十七歳で若死にしたようである。五声が早く死ななければ、井月のその後の人生も変わっていたかも知れない。}